錦絵から見た明治の風俗

廣瀬　尚美，岩城万理子，天川富美恵
（武庫川女子大学家政学部被服学科）

The Meiji Era's Fashion in Nishiki-E

Naomi Hirose, Mariko Iwaki, and Humie Amakawa
Department of Textiles and Clothing Sciences
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663

Western garment in Japan started Meiji era. Many big changes in politics and life of people took place in this era. Nishiki-Es served as important role like Newspaper by reporting among social events with pictures. Therefore we tried to grasp fashions of Meiji ear by studying Nishiki-Es which correctly described the social life of that era.

In fact, we can understand the flow of changes of the garments if we place Nishki-Es in a row according to the oldness.

はじめに

現代，日本人の衣生活は洋装一辺倒であり，伝統的な和服を着用する機会は，儀式その他の特別な場合以外ほとんどない．しかし洋服は当然のことながら，西洋からの輸入品で，日本人が現在の洋服の源流である本格的な洋服に接したのは，明治時代前後であった．しかもこの馴染みのない衣服を明治新政府は，政策によって庶民に奨励したのである．いわば洋装を強要された当時の人々のとまどいは想像以上のもので，風俗上の混乱が起こったのは当然であった．このちぐはぐな，滑稽とも言える風俗を明治の錦絵は克明に描いている．当時の錦絵は一種の報道的な性格を持っており，ニュース性に富んだ題材が多く扱われた．そこで正確な時代描写の錦絵を取り上げ，そこに現われた文明開化期の風俗の考察を試みることにした．錦絵を描かれた年代順に並べてみると，洋装化の流れがはっきり分かる．明治初期の錦絵は未だ江戸時代の風俗の名残があり，従来の和服を着用した人物が多く描かれている〔写真１〕．10年代になると，洋装小物を身に付けた男女の姿が多くなり，和服姿に靴を履いたり，パラソルを持ったり，帽子をかぶったり，いわゆる和洋折衷の風俗が見られるようになる．服装だけでなく街の様子にも，西洋建築や鉄道などが描かれ，徐々に近代化が進んでいく様子がうかがえる〔写真２〕．また鹿鳴館が完成した20年代後半には，バッスルスタイルの本格的な洋装を身に付けた貴

写真１
東京開化名勝 京橋石造銀座通り 明治7年 広重画 3枚続
Stone Buildings of Kyobashi and Ginza Avenue

写真２
東京小網町　明治21年　深景画　３枚続
Koami-cho district, Tokyo

婦人達の姿が数多く登場し，洋服が定着しつつあったことがうかがえる．

このように錦絵を通して，日本人の衣生活の洋風化の過程を読み取ることができるのである．

明治時代

大政奉還後の明治新政府は，欧米の制度や文化を模倣し，風俗の洋風化を奨励し，旧物打破に懸命であった．この極端な欧風奨励の結果は，和洋混同の異様な風俗を生み出すことになり，従来の日本固有の江戸文化や，伝統ある風習は破壊される傾向にあった．しかし明治も中頃になるとこの傾向は次第に反省の色を加えて，国粋保存の風が提唱され，風俗も日本風を残すもの，欧風化されたもの，また和洋折衷されたものなどが入り交じって，文明開化期の新しい風俗を作り出していった．

初期の風俗

明治時代初期は，日本古来の衣服の中に初めて，本格的な西洋衣服が導入された時期であった．16世紀に長崎にもたらされた，南蛮文化は当時の人々にとっては珍奇なものであり，その風俗は物好きな上層階級に取り入れられはしたが，一般庶民にまで浸透するにはいたらなかった．その取り入れ方も和服を基調にした衣服の中に，部分的に西洋服の要素を取り入れた和洋折衷型で，完全な西洋型衣服に改革されるところまではいかなかった．たとえば陣羽織の襟に西洋風の襞襟をつけたり，直線裁ちの羽織の裾に曲線を取り入れたり，といった程度の部分的な採用にすぎなかった．

写真３
加州金沢製糸場 明治10年 西尾慶治画　３枚続
Silk Yarn Factory in Kanazawa

これに対して明治初期の西洋風俗は，明治新政府が音頭を取って奨励した為，単に上層階級にとどまらず，一般庶民までを巻き込んだ本格的な西洋化であった．しかし当時の人々が採用した和風と洋風が混在する風俗は，現在では想像もつかないほど異様なものであった．たとえば，「直垂姿に靴」「ざんぎり頭に直垂に靴」「洋服の上に羽織」「チョン髷に洋風帯刀」「羽織袴に靴」「茶筅髷に洋服」「切り下げ髪に洋服足駄」「羽織袴に高帽子」「袴に洋服」〔写真３〕などの姿で街を行き交う人々の様子が，当時の新聞や雑誌に報じられた．

中でも最も目に付く風俗の変化は断髪であった．男女共それまで結い上げていた髪を短く切ることで，人々は新しい気風を味わう気分になったのである．しかし長年に亘る結髪の風習を固持する者も多く，男子の断髪については度々断髪令を出し，また結髪禁止令を布告して断髪を奨励した．このように男子には断髪を強制的に励行させようとしたが，女子はむしろ長い髪を切ることは好ましくないというのが当時の一般の風潮であった．婦人の断髪は，しばしば新聞その多で非難されたにもかかわらず，断髪にする者が多かったので，ついに明治５年４月に東京府から禁止の布告が出され，これは罰則を伴うきびしいものであった．髪型について当時の人々が戸惑った様子が，その頃に唄われた，次のような俗謡に現われている．「半髪頭を叩いてみれば，因循姑息の音がする．聰髪頭を叩いてみれば王政復古の音がする．じゃんぎり頭を叩いてみれば，文明開化の音がする．」半髪というのは，思い切って断髪にする勇気がない者が未練がましく，髷だけを切ってなでつけた長い髪型であった．政府はこの半髪を囚人の髪型にして，一般人の半髪をやめさせることに勤めたのである．このように髪型一つにしても，西洋化を励行させるために時の新政府は苦心をしたが，明治６年に明治天皇が自ら断髪を実行されたこともあって，庶民の間に徐々に浸透していった．

男子風俗

和風から洋風への過渡期として，最初は筒袖羽織に馬乗袴スタイルがあった．従来の衣服に比べるとこのスタイルは大変活動的であったので，軍隊の調練用の衣服として採用された．しかし本格的な洋服が日本で作られるようになったのは，明治２年に来日した英国人イー・ボウキスによってである．そして，翌３年には銀座にも洋服店が開業したが，明治４年の官令によると「自今散髪，制服，略服，脱刀勝手たるべし．尤も礼服着用の節は帯刀すべし」とあり，まだ刀が手放せなかったことが分かる．そして５年に大礼服・通常礼服の制が定められ，これにより洋服の採用を決定し，ようやく直垂・狩衣・袴が廃止されたのである．

当時我国で採用された男子服の正装は，燕尾服，フロックコート，蝶ネクタイ，ハイカラーのワイシャツ，チョッキ，ズボンなどで，下着としてシャツ，ズボン下などを着用した．これら一揃いの価格は，明治5年三田慶応義塾内に設けられた衣服仕立局の報謀によると，これは洋学生の半年分の学費に相当する金額で，かなり高価なものであった．

最初の制服採用は郵便配達夫で，4年3月に詰襟洋服を着用した．〔写真4〕引き続き同年10月には邏卒（巡査）が，5年には鉄道員が制服を着用し，またこの年には大礼服に燕尾服を採用している．そしてこの頃から官吏や教員も服を着るようになった．しかしこの過渡期には先にあげたような珍妙な服装が多く見られたのである．断髪の奨励によってチョン髷を落した頭には帽子を被ることが流行した．当時の帽子の高級品はラッコ製で，上流階級の人々はラッコ製の物を被った．一般の人々の帽子はラシャ製であったが，このほか麦藁製の帽子も人気があった．

写真4
郵便配達夫　Postman

帽子の普及とともに流行した物に洋傘があった．これは実用に使われるよりはむしろ一種のアクセサリーで，天気の良い日にも携帯して歩くことが流行った．洋装に欠かせない靴が日本で製造されるようになったのは，明治3年頃である．オランダ人シャルマンを招聘して，軍靴を作らせたのが始まりという．靴に必要な靴下も，アメリカからメリヤス機械を取り寄せて，明治4年には製造がはじまった．

このように西洋風俗は，先ず小物を部分的に取り入れることから始まった．洋服にまで手の届かない人々は，和服姿に帽子を被り，靴を履き，洋傘を持つことで西洋風を満喫していたのである．

女子風俗

婦人の洋装は明治になってもなかなか普及せず，ようやく10年代後半になって貴婦人の間で着られるようになった．16年11月に東京日比谷に鹿鳴館が落成し，多くの貴顕紳士淑女達が夜毎舞踏会を催した．これは時の政府の欧化政策により，外国人の好意を得るために開かれたもので，ここに集う貴族，高官達はほとんどが洋装に身を包んで参加した．この頃からようやく上流階級の婦人達の間で洋服が流行り始めたのである．当時の貴婦人達の服装は，イギリス式のコルセットで上半身を整え，下半身にはクリノリンやバッスルを入れて脹らませたおおげさな服装だったので，国粋主義者達からは非難を浴びた．それに非活動的な大きさからも，費用の面からも，一般庶民にはほど遠いものであった．しかしこれとは別に，18年に東京女子師範学校の教師・生徒に洋服を採用することになり，続いて地方の師範学校でも女子の洋服を採用し始めた．また19年には東京の小学校でも5年生以上の女生徒に洋服を着せるようになって，ようやく日常着としての洋服が定着するようになった．さらに21年に皇后陛下が，婦人服制についての思召書を下賜され，洋服が活動的で便利であることを説かれ，衣服の改良を勧められたので，婦人服は流行の兆しをみせたが，しかしまだ一般には女性は和服着用者が圧倒的に多かった．

洋服の着用とともに婦人の束髪も流行り始めたが，これを促進させたのは，“婦人束髪会”であった〔写真5〕．これは従来の日本式結髪がいかに不便・窮屈であり，非衛生的であり，不経済であるかを宣伝するものであった．これによって啓蒙された婦人達は，競ってこの会に入会した．18年9月に東京女子師範学校では，洋服の採用と同時に束髪を採用した．そして18年から21年にかけて，東京では束髪が大流行したが，24年頃一時下火になり，28年頃から再び夜会巻・フランス巻などの新しい髪型が出てきて評判になった．

写真5　改良束髪 明治18年 松井栄吉画 Improved Hair-Do

しかし，このように明治初年以来，奨励されてきた欧風化は，27年に始まった日清戦争によって社会の風潮が一変し，復古調が尊ばれるようになって，一時歩みを止めることになる．そして洋装よりも和服が流行

り始め，儀式や宴会にもフロックコートではなく，羽織袴姿が多くなり，女性の服装も大礼服を除いてすべて和服に逆戻りした．服飾品にも日本風が復活し，駒下駄，草履，蛇の目傘が流行り，アクセサリーも舶来の宝石を使った物よりも，金銀の彫り物や珊瑚，瑪瑙などの細工物が喜ばれ，髪型も束髪よりは日本髷を結う女性が多くなったのである．

錦絵の概要

浮世絵版画の中で多色摺りのものを錦絵という．錦絵は明和２年（1765年）に江戸の好事家の間で絵暦の競作が流行した時，鈴木春信（1725～1770年）が版画の彫師や摺師の協力を得て考案したものである．

それまでの浮世絵の版彩技法は，画面の一部に限られた色を象徴的に施す程度の素朴なものであった．これに対して錦絵は数色から多いものでは数十色以上のもの多色の色版を使って摺りあげ，現実の色と合い通ずる合理的な彩色が可能となった．

また錦絵の版彩による明快な色面の配置は，肉筆浮世絵とは異なった独自の色彩美を開拓し，その美しさは錦繡のごとく美麗なことから，「錦絵」と名付けられたのである．

錦絵が誕生した時期は，幕府のたび重なる改革や禁止令が施行され，人々は抑圧を強いられた生活を余儀なくされていた．一般庶民は現実からの逃避として，愛欲や笑いを錦絵に求め，錦絵は人々の本能の発露として重要な役割を果たしていた．したがって江戸時代の錦絵は，夢や空想を追い掛ける庶民の欲望を充たすために，遊里や歌舞伎を題材としたものが多く，遊女，役者，美人を描いたものがもてはやされた．

これに対して明治期の錦絵は，性格的に江戸期の錦絵とは大きく異なり，題材を広域な社会に求め，変動する世相を描写したものが多く，一種の報道的性格を持ったものであった．たとえば，横浜絵，戦争絵，御所絵等がその代表的なもので，中でも文明開化期の新風俗を描いた錦絵を特に，「明治絵」と呼んで区別している．また色彩の面で，アニリン系の赤色が目立つところから，「赤絵」「赤摺絵」と呼ばれている．これは江戸期の錦絵が，中間色を基調として微妙な美しさ表わしたのに対して，「赤絵」「赤摺絵」は極彩色の濃厚な色彩の配置が特徴で，美術的評価はあまり高くない．

いずれにしても，明治新政府が掲げた，富国強兵，文明開化のスローガンは，政治・経済・外交・宗教・教育・軍事の各方面で具体的に政策化され，その実をあげつつあった．その結果，階級統制からの開放，特権階級の改廃，自由民権の回復などが実現し，それにともなって，錦絵の取材も選択の自由が与えられ，大衆性と速報性の機能を最大限に発揮することができるようになった．当時，東京日々新聞に掲載された解説入り錦絵は，通俗的な興味をそそる三面記事を題材にして定期的に刊行され，報道的性格はもとより，鑑賞用，土産用として流行した．

このように明治期における錦絵は，町人芸術から民族芸術の域に達したと同時に，その後の印刷及び写真美術の技術革新に少なからず貢献したと思われる．

東京名勝　高縄鉄道之図　明治４年　広重画　３枚続

東京汐留鉄道開業祭礼図　明治５年　広重画　３枚続
Inauguration Ceremony of Tokyo Shiodome Station

この絵で先ず目に付くのは，題にローマ字を書き添えていることである．鎖国が解かれ，西欧文化が急激に取り入れられていった様子がよく分かる．しかしそれが極めて付け刃的なものであったことが，ローマ字が右から書かれていることからうかがえる．

画面には二台の馬車が描かれており，左は乗り合い馬車で当時「ガタ馬車」と呼ばれていた．どちらの馬車馭者も，山高帽にスタンドカラーの赤い上衣に靴というスタイルであるが，左の馬車の乗客

は皆，和服姿である．自家用馬車と思われる右の馬車に乗っている人々は完全な洋装をしている．この他，人力車に乗る人，それを引く車夫，大八車を引く男，旅商人，行き交う町の人など，品川あたりの賑わう町の様子が描かれている．洋装の人々に混じって和服の人物が多く描かれているが，明治４年頃にはこのように，一般庶民はまだ江戸時代そのままの和装が多かったのである．当時，洋服は非常に高価なものであり，政府の洋装奨励にもかかわらず，これを身に付けることができた人々は，いわゆる旧公家，旧幕臣など華族と呼ばれる特権階級に限られていた．この絵の中にも，腹掛けに股引姿，法被に股引姿，半纏に脚絆姿，合羽姿，手拭を吉原冠りや姉様冠りにした人など，江戸時代の風俗が描かれている．そして完全な洋装と和装に混じって和洋混同のちぐはぐな風俗も見受けられる．画面左の方の男性は，洋服の裾から刀の先が見えていて，洋服に帯刀していたことが分かる．また頭も髷を結っており，断髪令が出されても，なお髷に執着した様子がうかがえる．現代では想像出来ない文明開化期特有の奇妙な風俗である．和装の人々も洋風の新しい小物を身に付けることは積極的であったようで，吉原冠りの男性も手には蝙蝠傘を持っている．

このような異様な服装は，当時の西洋文化に対して積極的に取り組もうと努力した，当時の人々の心意気の現われであろう．

堤防の上を走る鉄道は，明治５年（1872年）の旅客輸送開始以前の様子である．

東京汐留鉄道　御開業祭礼図　明治５年　広重　３枚続

明治５年９月21日，東京～横浜間の鉄道の開業を祝うために天皇陛下を始め皇族方をお迎えして，盛大な開業式を挙行した時の模様を描いた錦絵である．当日は日比谷操車場で近衛兵が祝砲を鳴らし，品川沖に停泊中の軍艦は賀砲を発し，花火も打ち上げられるという賑やかな祝典であった．上空に舞う洋傘は花火に仕掛けられた，玩具の傘である．開国後，西欧の列強に太刀打ちできるだけの国力を養うためには，産業の振興は最大の課題であり，その実現には鉄道の開発はなくてはならない事業であった．従って明治政府がこの鉄道開業にかける意欲は大変なもので，国民の勢威を煽る意味でこの開業式は盛大に行なわれた．

東京名勝　高縄鉄道の図　広重画　明治４年　３枚続
Railway in Takanawa district, Tokyo

ここには政府高官をはじめ，この式典を見物につめかけた一般庶民の姿も描かれている．先ず式典に参列している人々は，当時の正装を着用している．この年（５年）に，大礼服・通常礼服が制定されたが，ここでは末だ直垂形式の和服に侍烏帽子という装いである．洋装の男性も見られるが，これも色物の上衣や帽子を着用しており，儀礼服の規定にはずれる姿で，制定以前のものと思われる．列車の中の人物も洋装と和装の両方が描かれているが，おそらく天皇はじめ皇族方は洋装で，政府高官は末だ和装なのであろう．見物の庶民はちらほら断髪・洋装の人物も見えるが，ほとんどが和装で，チョン髷を結っている人が多い．明治４年に発令された「断髪令」が，末だゆきわたっていないことが分かる．

左上方には煉瓦造りの立派な西洋館も描かれていて，欧風化が進みつつあったことがうかがえるが，服装に関しては江戸時代そのままの和装と，新しい洋装の出席者が一堂に会しているところなど，過渡期の風俗がよく現われた絵である．

区立小学校置教師亦洋学導所　謂生徒鳴呼知識増基
明治10年　真匠銀光画　３枚続
第二回　上野博覧会之図　明治14年　広重画　３枚続

洋装化は男性から進んだのは当然で，明治10年代には女性は末だ和服が一般的であった．上の絵は明治10年代に教育界で活躍していた人物を一堂に並べて描いたもので，福沢諭吉，伊藤博文，田中不二磨などはりゅう

とした洋服姿で描かれている．しかし10年代には和服姿の男性もまだ多く見られ，この絵の中にも和服の着用者が見られる．しかし和服の男性も帽子をかぶったり，眼鏡をかけたり，ステッキを持ったり，と洋装小物を身につけて，「洋風化は先ず小物から」という流行がうかがえる．一方女性は和服姿ばかりであり，髪型も断髪姿は描かれていない．しかし袴をはいて，洋傘をもった女性などは江戸時代とは異なった，文明開化期の新しい女性の姿であり，洋装化への過渡期の風俗である．

区立小学校置教師亦洋学導所　謂生徒鳴呼知識増基
明治10年　真匠銀光画　3枚続
Politicians and Leaders in Education

下の絵は明治14年3月1日から6月30日まで，上野で催された博覧会を描いたものであるが，おそらく開会式当日の光景であろう．式典に出席した政府高官や女官達と思われる．明治5年に洋装による男性の礼服制度が正式に定められ，それらは燕尾服・フロックコート・モーニングコートなどを採用したものであった．これらの呼び名は上衣によって付けられたので，この上衣に付属するズボン・帽子・チョッキ・ホワイトシャツ・ネクタイ・靴下などの材質・色まで細かく定めていた．この絵の男性達は燕尾服で装っていると思われる．因みに燕尾服の規定は，上衣は黒羅紗，帽子はシルクハット，ズボンは黒羅紗，チョッキは黒羅紗または白リネン，ホワイトシャツの襟は立襟または折襟，ネクタイは蝶結び，手袋は白革，靴は黒エナメル，靴下は黒，外套は黒無地というものであった．

第二回　上野博覧会之図　明治14年　広重画　3枚続
Exposition at Ueno

これに対して女官達は和装礼服である袿袴姿である．袿の生地には唐織が用いられ，文様は鳳凰・雲鶴・葵などめでたいものが多く，地色は禁色（深紫，黄櫨染，黄丹，黒）以外の色は適宜使用してもかまわなかった．袿の下の小袖には白練絹を用いたが，夏は晒布の小袖を着用した．袴の生地は精好織（せいごうおり：地質が緻密・精美な絹織物），色は緋色で切袴であった．髪型は垂髪にして，扇または緋扇を持った．

完全な洋装の男性と純粋な和装の女性の取り合わせは，現代の礼装にも引き継がれているようで，我々も余り不自然さを感じさせないが，これは明治初期からの習慣であろうか．　この博覧会場の噴水は，第一回の博覧会以来評判になり，見物人が大勢おしかけたという．後方の建物は鹿鳴館と同じくイギリス人コンドルの設計によるもので，のちの上野博物館である．

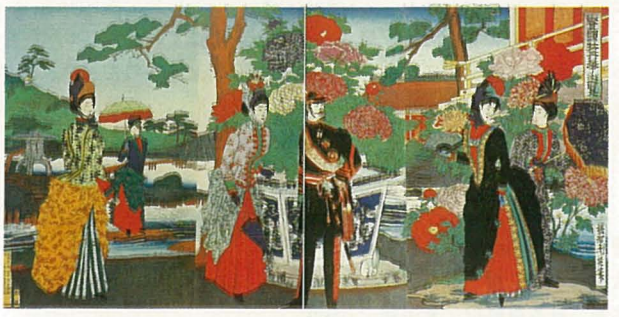
貴顕牡丹華遊覧　明治21年　揚州周廷画　3枚続

20年代になると，本格的な洋装に身を包んだ貴婦人達が多く見られるようになる．この絵はバッスルスタイルに装った貴婦人達が，牡丹の花を愛でているところである．バッスルスタイルというのは19世紀後半から西欧で流行したスタイルで，後腰に腰当て（バッスル）を入れて膨らませたシルエットである．上半身はコルセットで胸を豊かに整え，スカート部分の前面は腹部を押さえて垂直に垂らし，後腰だけを極端に張り出させたスタイルである．このスタイルは西欧ではクリノリンスタイル（下半身を円錐形に膨らませたシルエット）のあとを受けて登場したが，いかにも人工的で，グロテスクなシルエットであったため，余り評判がよくなかったので間もなく下火になり姿を消すことになる．しかしこの短期間の流行シルエットが日本にもたらされ，日本の女性は初めての本格的な洋装としてこのスタイルを取り入れたのである．このスタイルの一つの特徴はスカートを重ね着にすることで，ドレスのスカートをたくし揚げて，アンダースカートを見せることで

あった．この絵の貴婦人達もその着こなしで描かれている．この着装法は，西洋ではすでにルネサンス期から度々行なわれ，ドレスとアンダースカートの組み合わせを楽しむお洒落であった．このかなり高度なお洒落を，初めて洋装に取り組んだ日本女性が，頭の上の帽子から靴にいたるまで，一分のすきもなく見事に着こなしている様子がこの絵からうかがえる．これはいわゆる当時のトップモードの女性の姿であろう．この20年代には鹿鳴館が完成し，紳士淑女達が夜毎舞踏会を楽しんだのであるが，そこに集まる女性達はこの絵のようにバッスルスタイルに装っていた．

中央の男性は軍服を着用している．口髭や顎髭をたくわえた様子，肩章，袖章，肩からかけたサッシュベルトなどの立派さから陸軍大将であろう．

このように庶民の生活からかけ離れた上流階級を題材にした錦絵は，人々に憧れを持って受け入れられると同時に，それらは当時のファッション雑誌の役割を果たしたのである．



貴顕牡丹華遊覧 明治21年 揚州周廷画　3枚続
Ladies and Gentlemen enjoy Peony Flower

美人観吉野園花菖蒲 明治28年 年方画　3枚続
Beauties enjoy Iris at Yoshino-en

美人観吉野園花菖蒲　明治28年　年方画　3枚続

明治初期から政府の音頭取りで，順調に進んできた欧風化も20年の後半になって一時，逆戻りの傾向を見せ始めた．22年2月に「大日本帝国憲法」が発布されたことから，日本古来の国粋的なものが見なおされたことや，27年に始まった日清戦争などが契期となって伝統的な文化を尊ぶ風潮が現われたのである．従って服装も洋装よりは和装が好まれるようになった．そしてこの頃から日本は西洋一辺倒の文化から，西洋に頼らない日本独自の文化創造の道を歩み始めることになる．

この絵に描かれた東京葛飾の吉野園は，当時の人々に風雅な安らぎを与える場所として人気があった．当時の風俗として三人の登場人物は和服を着ているが，この様に洋装の人物が描かれていない明治の錦絵は珍らしい．しかも真ん中の女性の着物の柄は矢絣で，純粋な日本的文様である．右側の女性も，大名縞と思われる地味な縞柄の着物を着て，二人とも紙を島田髷に結い上げている．少女は帯を大きく矢の字に結んで，着物はでんでん太鼓の模様である．時代を感じさせる物は手にした蝙蝠傘だけという，まことに日本的な，江戸時代に

逆戻りしたような風情の女性達である．

この絵の色調も，明治絵特有の極彩色を避けて，全体に淡い色彩でまとめられ，江戸時代の美人画を彷彿させる古典的な作品に仕上げられている．

このように20年代末は，一時的に文明開化の西欧化を忘れたように，復古調が持てはやされた時期であった．

ま と め

江戸時代から庶民に親しまれてきた錦絵は，明治時代になってその性格を大きく変えることになった．即ち，美人画が代表であったそれまでの錦絵と異なり，明治絵と呼ばれる錦絵は，報道的なニュース性を帯びる様になったのである．文字よりも印象が強く，また理解もし易い錦絵は，現代の写真グラフのような役割を演じるものとして，庶民に歓迎されたのである．と同時に錦絵に描かれた上流階級のトップモードは，庶民にとっては一種のスタイルブックやファッション雑誌の役目も果たしていた．

鎖国が解かれ，初めて接した西欧文明に，戸惑いと憧れを抱いた当時の人々は，現在の我々が想像も出来ない程の奇妙な風俗を生み出したのである．そしてそれらを克明に描いた錦絵の時代描写は，日本古来の衣生活から，現代の洋服中心の生活への移行の過程を知る重要な資料である．

参 考 文 献

江馬務著作集　第二巻　中央公論社　昭和51年
斎藤隆三　近世日本世相史　博文館　昭和３年
谷田閲次・小池三枝共著　日本服飾史　光生館　1989年
豊泉益三　近代世態風俗誌　近代世態風俗誌刊行會　昭和26年
山辺知行　明治の文様（染織）　光琳社出版
遠藤武・石山彰　写真に見る日本洋装史　文化出版局
丹波恒夫　錦絵に見る明治天皇と明治時代　朝日新聞社
遠藤武・石山彰　図説　日本洋装百年史　文化出版局
槌田満文　明治・大正風俗語典　角川選書
小西四郎　錦絵　幕末・明治の歴史６　文明開化
　　錦絵　幕末・明治の歴史７　士族叛乱
　　錦絵　幕末・明治の歴史９　鹿鳴館時代
　　錦絵　幕末・明治の歴史10　憲法発布
　　錦絵　幕末・明治の歴史11　日清戦争　講談社
山根有三監修　日本美術史　美術出版社　1979・３・25
秋山光和他編　世界美術辞典　新潮社　1985

（1989年９月27日受理）